公益社団法人
中部日本書道会
濃飛
濃飛支部会報
第12号
●発行●
令和５年２月
濃飛支部広報部
電話 0573-28-1437
●印刷●
㈱協和印刷工業
電話 0573-66-3788
題字　故永冶秋聲

書のあり方（書の核心）

濃飛支部長　三野島　凌雲

『書譜』では、書の本質へと論を展開している中で、「心手双暢」（心境も手腕も共に上達する）のように精神と技術の調和を強調している「心手論」は、六朝の書論に登場している。書論の一つとして、書において心と手が和合して一つになっている段階に達した心境というものが大切だという点は、「書はまさしく心の画なり」と言えるだろう。

楊守敬は、「書品」のことを示している。書を見ればその人柄がよくうかがうことが出来るとか、心の動きがわかると示しているところであろう。書を書く人にとって大切なことは天分もさることながら「品が高い」ことが重要であるとしている。「書品」のある書を書くには、書芸を気にしながらもやはり「人格」にこだわることは書のあり方を論ずるのに重要であろう。

明治の大家、中林梧竹は、『梧竹堂書話』に、「書に皮肉骨がある。この三つのものがそなわって後に品位生じるのである。骨が肉に勝てば枯れる。肉が骨に勝てば綺となる。骨肉がほどよくて後にいわゆる文質かねそなわるのである。余韻は正気から生ずる。正気充ちて後に筆勢全くなる。筆勢全くして後に余韻が生ずる。故に正気が行間にみなぎり満ちているものは筆勢必ずつよく健く、余韻必ず点画の外に溢れている。それはちょうど金物の音は、後にひく響きが必ず長いのと同じである。」とある。

虞世南の孔子廟堂碑は、「書品の高きこと唐朝第一」と言われた。加えて、学業、徳行などが背景にあるからしてあのような書品のある書が書けたのであろう。

いずれにせよ、心手のバランスが崩れないよう平生の修練が必要であるということであろう。

さらに、「書は心を磨くもの」の視点から、教育基本法第一条の基本的な教育の目的である「人格の完成を目指し」とあるように、その達成に努めなければならない。その達成を目指す指標の一つに「伝統の継承」がある。

世の中を見据えても、精神性と造形美による書文化は、日本の文化史においても必要不可欠の要素であり、伝統文化の根幹であると言えるだろう。

このことからも、今後一層書の振興が重要になってくるであろう。

第三十六回濃飛支部展

会期　七月二十九日(金)～三十一日(日)
会場　恵那文化センター　集会室
出品点数　七十点
賛助出品　四点
理事長　伊藤仙游先生
副理事長　岡野楠亭先生
副理事長　加藤　裕先生
副理事長　松下英風先生

コロナ禍の中、検温、消毒など対策に万全を期し広い会場で開催しました。来訪者は三百十五名余、皆さん熱心に御覧戴き、御指導、御鞭撻を戴きました。

濃飛支部総会

日時　七月三十一日(日)
会場　恵那文化センター　多目的研修室

本部より副理事長加藤裕先生、松下英風先生に御臨席戴き、四十名の出席で行われました。

松下先生より祝辞を戴きありがとうございました。事業報告、収支決算報告、監査報告等承認されました。

続いて四年度の事業計画案や収支予算案も承認されました。

濃飛支部講演会

日時　七月三十一日(日)
会場　恵那文化センター　多目的研修室
講師　本部副理事長　加藤　裕先生
濃飛支部役員　堀　梅肇先生

加藤裕先生の講演
演題　新調和体から近代詩文へ

過去、明治、戦後の調和体から近代詩文の移り変わりとその意義について詳しくわかり易くお話して戴きました。

加藤先生は、近代詩文の御講演の後、創作作品を次々と揮毫して下さり会場が感動の渦に巻き込まれました。

堀梅肇先生の講演
演題　篆刻について

中国が篆刻の起源であること、印文として彫られた文字の特殊性、印材もいろいろあること、その他篆刻三法など知らない事が多く、興味深くお聞きしました。

刻された印や道具など展示して戴き、篆刻に興味を持たれた方も多くありました。

今年度は二人の先生に講演して戴きありがとうございました。

堀 梅肇さんの講演より

安藤　朱游

濃飛支部展の開催中に、堀梅肇さんの篆刻に関する講演が実施されました。多くの方に出席していただきました。

書と篆刻は切っても切れない所がありますが、あまり知られていません。篆刻には、甲骨、金文、春秋戦国篆、古璽（こじ）、簡帛（かんぱく）、小篆、印篆などの字体があり、これは時代によって変わっていますので、印稿を作る時は同時代の字体を使って作ります。同時代の字の中でもたくさんある時代と一つもない時代があるので印稿を変えたりして、石の上にバランスを考えながら写し、バランスの悪い時はデフォルメをして書く時もあります。石に写す時は字の左右を反対にして写します。石は中国にしかない青田という石が彫りやすく、その石を多く使います。さあ、写せたら印刀で彫っていきます。印刀は、刃先が斜めではなく、水平になっているもので彫ります。彫り上がったら印泥をつけて試し押しをして、いらない所は彫ったりして仕上げていきます。紙は、習字の紙より少しうすくて強い紙、羅紋紙（らもんし）を使います。石が彫り上がりました。紙に押してみましょう。紙の中央のたて半分より少し上に印を押し、左端に、題と氏名（雅号）を書き雅号印を押し作品が出来ました。

堀さんには、出来上がるまでの道具、作品などを見せてもらいました。

支部交流会
―今年も中止となり残念―

コロナ禍の中、三年間も交流会が出来なかった。今年こそは出来るかなと思い二月の始め予約に行った。会場は恵那峡カントリークラブだ。訪ねてみて驚いた。経営者が変わっていた。恵那高原開発株式会社MINAMIGROUPの経営だ。その日は晴天で景色も良く広々としたゴルフ場であった。営業部長の三戸さんにお会いする事が出来た。

「今二月、十月頃にはコロナも下火になるでしょう。」

と言う事で予約する事が出来た。その後一部の会員の方と下見も兼ねて食事に行った。

「自然が美しく空気も澄んでいてこんなにいい会場で交流会が開けたら最高だね。」

という事でマイクロバスの送迎まで予約して帰って来た。そしてどんな交流会にするのか内容の計画が進んだ。みなさんに喜んでもらうためソプラノ歌手の方にお願いし、音響その他もお願いでき順調に準備が進んだ。後は当日を待つのみだ。皆さんの喜ぶ顔が浮かんだ。

ところが十月になってもコロナは猛威を増すばかり。コロナはどうなるか、会はどうしようか。出演してくださる方と連絡をとりながら戸惑っていた。

十月の初め、営業の三戸さんから連絡があった。

「このままでは、コロナが収まる様子もなく感染が心配されるので中止にしましょうか。又の御利用をお願いします。」

と言う事であった。残念だけどこの状況ではどう仕様もなかった。出演者の方にも丁重にお断りし、今年の交流会も中止となった。

残念ではあるが、会員相互の又本部の先生方との交流の場も持てないまま、今年の濃飛支部展も終わった。

文責　中垣　幸聲

支部展をふり返って

田口　秋水

本年度もコロナ禍の中での開催となりましたが、開催できた事は良かったと思います。

本部からの賛助作品をはじめ、会員皆さんの作品を見て書に対する刺激をいつも受けています。また作品を書いた人とも話ができ、良い時間がいつも過ごせます。

講演会では、堀梅肇先生の篆刻をわかりやすく説明する講演があり、自分も少しやってみたいなと感じました。

加藤裕先生の実演では、会員の皆さん全員がすばらしい作品を見て感動している様子が印象に残っています。

コロナ禍で交流会は無くなってしまいましたが、来年度は交流会が開催できる事を願っています。

第七十一回 中日書道展 入賞者

準大賞　堀　梅肇
桜花賞　長谷川秋峯
特　選　長谷川鳳聲
準特選　阪田　華香
〃　田中　凌山

準大賞 受賞者
準大賞を受賞して

堀　梅肇

この度は中日書道展に於いて準大賞という篆刻部門では最高の賞を頂くことができ、大変光栄に思っております。

篆刻は数センチ四方の材質の中に色々な情報を表現するもので、時代に沿って変わって来た文字や表現方法の違いを勉強しながらいかに美しく安定した作品に仕上げられるか努力して来ました。今日まで五里霧中の感じで進めて来ましたが、先生方の御指導や、仲間の応援、アドバイスにより今回の受賞となり感激している次第です。

今後更に研鑽を重ね自信を持って作品が出来るよう進めて行きたいと思います。ありがとうございました。

桜花賞 受賞者
桜花賞を受賞して

長谷川秋峯

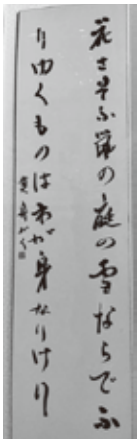
このたび、第71回中日書道展に於いて桜花賞をいただき大変嬉しく思っています。

コロナ感染症もおさまらず、ウクライナにおける侵略戦争も終わりが見えない中、作品を書けるということは、平和と健康のおかげですが、これまで、オリンピック精神のように『参加することに意義がある』との思いで頑張りすぎず、そして力を抜きすぎずと作品を書いてきたように感じる私には、今回の受賞は「もっと努力せよ」という励みになるかと思

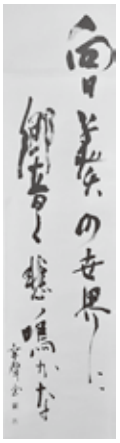
います。
この受賞は暢陽会の諸先輩の方々、名古屋から来ていただいた後藤啓太先生、奥様、皆様のご指導、ご支援の賜物と感謝しお礼申し上げます。

第三十一回 中日書道会 匠展 壽展 出品者

今井　仙童



中川　貴舟



中垣　幸聲

読売書道展 入賞入選者

秀　安藤　朱游
〃　逸　堀　梅肇
〃　佐野　麦静
入　成瀬　伸芳
〃　選　阪田　華香

毎日書道展 入選者

入　選　石原　聲風
〃　斉藤　千秋
〃　田口　秋水
〃　西　恵香
〃　中垣　幸聲
〃　林　幸湖
〃　長谷川秋峯
〃　増田　春暉

第七十四回 道風展 入賞者

奨励賞　熊崎　明雪
特　選　髙津　華舟
〃　選　水口　雲峰

恵那市民展 入賞者

教育長賞　長谷川鳳聲
努力賞　堀　梅肇

市展賞 受賞者 教育長賞を受賞して

長谷川鳳聲

この度は「第六十五回恵那市美術展において教育長賞」という大きな賞を頂き、誠にありがとうございました。このような賞を戴き大変驚きました。
書は高校生の時、選択科目で書を始め、卒業後はぜんぜんやらなくなりました。ある時、堀梅肇先生との出会いで、書の道に入り、日比野先生に書を見て頂いて、いろいろと字の添削をして戴き、中日展に出品したりしました。師のもとに、ペン字、かな、また古典の漢字、かな交り、長鋒の筆の出会いを楽しみながら筆の持てる人生を過ごし本当にありがたく思っています。おかげ様で、多くの師、友を得ることができました。
（公）中部日本書道会の理事長、副理事長、事務局の先生方の作品と濃飛支部会員の皆様の力作、大作を拝見させて戴き刺激をもらいました。私も、もっとしっかり作品に取り組み、制作しなければと思いました。濃飛支部会展では、加藤先生、堀先生の講演があり、楽しく、面白く、興味深いお話が聞けましたことを感謝しています。またこの様な賞を戴けることは、本当に嬉しく思っています。濃飛支部の諸先生方の温かい励ましが戴け何よりでございます。
今後共、ご指導の程よろしくお願い致します。

各社中だより

書道研究 暢陽会 会員展 学生展 故永冶秋聲先生回顧展

石原　聲風

令和四年度書道研究暢陽会、会員展を十月十四日より十五日まで開催致しました。同時に学生展及び永冶秋聲先生回顧展も同時開催致しました。
今回はテーマは「永冶秋聲先生の教えありて」としました。
本年もコロナ感染症の中、開催も危ぶまれましたが、会員同士励まし合い乍ら、作品研究会を何回か開催、テーマに沿った、思いをこめた作品ができたかと思います。
作品点数約七十点となり、中津川市にぎわいプラザ五階会場に展示しました。
作品は楷行草に、かな・調和体・篆書・水墨画と多様な作品に、全紙の大作も展示されました。
やはり時節柄平和な世界への思いを託す作品が多く目を引きました。

本年の特別企画として暢陽会創設者の故永冶秋聲先生の回顧展を開催致しました。作品数三十点とし大作も多く感動を呼ぶ作品でした。また、永冶先生の御子息はじめ、御親族の方々が遠方より駆け付けて下さいました。
第六十回永冶書院教育書道連盟学生展も同時開催し、作品五十一点が展示されました。子供が自分で考え選んだ字句を半切の用紙に思い切って書きました。力強い作品が出来上がりました。
多くの方にご高覧を戴きました。感謝申し上げます。撤収後反省会も兼ねて食事会を開催し和やかなうちに終了となりました。

永冶先生御子息

さんぽみち

飛騨高山古い町並 上三之町

阪田　華香

私の住む高山市は岐阜県の北部に位置し、森林面積九十％を占める人口八万五千人弱の風光明媚な町です。

今から約四百五十年前に越前大野城主であった金森長近が高山に築城しましたが三百五十年前に幕府直轄地になってからは取り壊され、今は城山公園となり市民の憩いの場になっています。

築城と同時に城下町の整備が行われ、城に近い所から一之町、二之町、三之町と、京都を参考に碁盤の目のまちづくりになっています。高山が小京都といわれる由縁です。

さて私の住む上三之町は国選定重要伝統的建造物群保存地区「伝統的建物保存地区」に指定され、江戸時代後期から明治時代にかけて建てられた町屋建築が並んでいます。

建物の色も統一され格子戸がはめられ、表側は間口を狭くし奥に長い、いわゆる「うなぎの寝床」の作りで、玄関を入ると吹き抜けになっていて、囲炉裏がきってあり、奥にいくつかの室があり、土蔵の前に小さな中庭があるおかげで、夏は少し涼しい気がします。

間口が狭いのは節税対策だそうです。家の前は車一台が通れる巾で、両側の水路は防火用水でもあり独自の自衛消防団もあります。

上三之町の住人は日枝神社の氏子であり、例祭（高山祭の屋台行事）の「ユネスコ無形文化遺産」に登録された、日本三大美祭の一つ「春の高山祭」に参加し「重要有形民俗文化財」に指定されている祭屋台を二台（恵比須台と龍神台）保有し、伝統文化を維持しています。

"豪華絢爛"の一言で、祭当日は各町内全十二台の祭屋台が曳き揃えられ、神事、祭行列や衿装束も必見です。

夜は屋台に提灯が灯り、ゆら〳〵、ゆれる様子が幻想的で感動です。

高山には伝統的工芸品の春慶塗や一位一刀彫、白磁の渋草焼又匠の技の木工品、高冷地野菜、ブランドの飛騨牛、お酒などたくさんあり、又、高山市内から一時間ほどで奥飛騨温泉郷や北アルプス群、白川郷や下呂温泉などへ行けるなど、まだ〳〵見ごたえのある場所がたくさんあります。

変化にとんだ四季折々の風景が楽しめる飛騨高山古い町並上三之町です。

ちなみに上三之町は「かみさんの町」で各家のおかみさん達が、家族と共に地域を支え、家や伝統文化を守り、次の世代へと繋げていけるよう奮闘しています。

令和五年度 事業計画

事業名	予定年月日(曜日)	実施・開催場所
支部展	令和５年８月４日(金)	中津川市 にぎわいプラザ
	令和５年８月５日(土)	
	令和５年８月６日(日)	
支部集会	令和５年８月６日(日)	
講演会	令和５年８月６日(日)	
支部交流会	令和５年８月６日(日)	中津川市
企画委員会	令和５年４月	中津川市
	令和５年９月	恵那市
役員会	令和５年８月	中津川市
	令和５年11月	下呂市
	令和６年１月	恵那市
研修会	令和５年11月	
支部報13号	令和６年２月１日発行	その他

会員募集

書へのいざない

書は一生書き続けてもこれでいいという終着点はありません。だから何才になっても続けられるのだと思います。自分との闘いです。

あくなき追求に楽しめる書を始めてみませんか。一緒に楽しみながら生き甲斐の持てる書への入会をお待ちしています。

会員部

編集後記

今年も会報第十二号を発行する事が出来ました。

二〇一九年十二月からコロナの感染が世界中に広がり今年で四年目に入りましたが収束の見通しもつかないまま人の生活も人間としての考え方も随分変化して来ました。コロナ患者の死亡者も六万人以上と聞きます。一人の命どんな命でも大切なのに六万人以上の命が奪われた事実は黙視する訳にはいかず、基本的人権の尊重を明記した日本国憲法の理念を今こそ大切にすることが私達に課せられた責務だと思います。

中日書道会濃飛支部も高山市、下呂市、中津川市、恵那市、瑞浪市、多治見市、土岐市と七つの広範囲から集まった書道愛好家会員の集まりの会ですが、皆さん遠方から集まり会議や展覧会等行って来ました。

しかし会員の高齢化や介護など大変な状況が起きています。それでも会員の皆さんは知恵や力を働かせ書作品を展覧会に出品し、すばらしい作品を生み出しています。どんな困難な中にあっても書への生き甲斐はとどまる事がありません。みんなが力や知恵を出し合い一人一人の立場や個性を大事にし、濃飛支部が益々発展する事を願い、原稿を寄せてくださった皆さん、編集に力を貸して戴いた皆様に感謝します。世の中大変ですが、健康に気をつけ命を大切にこれからも精進される事を願って筆を休ませます。ありがとうございました。

（広報部長　中垣幸聲）